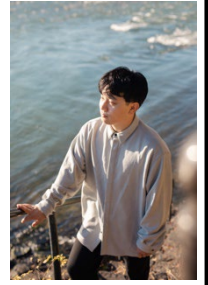


ケアするように復興を書く

復興に関わる経験を渦巻きながら誠実に書くことの倫理

東京大学大学院総合文化研究科／独立行政法人日本学術振興会

特別研究員 PD 土田亮



1. はじめに

本論考^{補注(1)}の目的は、2024年能登半島地震および豪雨災害を含む能登半島複合災害の調査や支援に関する断片的な事例から見出される被災者／支援者という枠組みを、人類学者 Lisa Stevenson の *Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic* (2014, 以下 *Life* と記す)¹⁾を手がかりに検討し、復興に関わる際のケアと倫理のありようを考察することである。

筆者は石川県内の複数地域で多様な立場からフィールドワークを行うなかで、復興支援をめぐるポジショナリティと記述の困難に直面し、ままたらなさや葛藤、ときに燃え尽きに近い感覚を経験してきた。そこでは苦しみや悲しみの傍らに臨み、寄り添うことを通して浮かぶ問い、すなわち、ケアや他者を描くこと、自己を省みることを含む広義の「聴く／書く」行為において、認識や実践をめぐる立場性と倫理に何を付け加えうるのか、という問いにとらわれ続けてきた。

フィールドに立ち会うなかで生じる困惑は、エスノグラフィ（人類学や社会学などで用いられる、人びとの暮らしや認識世界へ入り込む参与観察やフィールドワークをもとにした記述²⁾やモノグラフ）や文学で描かれる世界とどこか重なり合う。文化や社会的背景、関係性などは異なるはずにもかかわらず、不思議とその情景や登場人物の感情、言葉に既視感を覚える。そうした意味でエスノグラフィは、科学的な厳密性や客観性と、文学的な喚起性や主観性という一見対立する要素を巧みに調停しながら、そのあいだを往還することで読者の理解を広げるものといえる³⁾。エスノグラフィは、未知の外界、あるいは既知の世界とのあいだを往還し、人と人をつなぐ窓のような存在、あるいはひとつのジャンルとして捉えることもできる。

ひるがえって、被災や支援の現場を記述する際、既存の枠組みに還元しがたく、取るに足らないもの出来事や分がちがたく、語りにくい経験の描写に既視感を覚えるとき、それはどのような理解を辿っているのだろうか。本論考では自身の復興支援の経験と *Life* との対話を通して、ポジショナリティと記述の困難、そしてケアに胎動する倫理的な態度の可能性を示す。

なお、本論考で扱う倫理の概念については、古田による道徳と倫理の以下の整理⁴⁾を参照する。

道徳 (moral) は、画一的な正しさや善を指向し、万人に対する義務や社会全体の幸福を俎上に載せる。「困っている人は助けるべきだ」とか「嘘をつかず、どんなことも包み隠さず話すべきである」といった規範は、その人の能力や状況の如何を問わず、常に普遍的な正しさを前提としている。しかし、その「すべき」には「すべきだが、できない」というジレンマの可能性を十分に前提としていない。したがって、こうした規範は、暗黙のうちに「できること」を含意しており、「なぜ、すべきことをできたにもかかわらず、その状況で行わなかったのか」という非難と結びつきやすい。

一方で、倫理 (ethics) は、何をなすべきかという問いだけでなく、どのように生きるべきかという個別的な問題を含む。そこでは「すべきかどうか」だけではなく、「できるか、できないか」という審級も問われる。ただし、そこには明確な答えが定まっていない現在進行形の問題も含まれるため、道徳では解決しきれない状況において、人は自らなりに最善の行為を模索しながら逡巡することになる。ゆえに、その結果は必ずしも非難と結びつかない、と古田は整理している。

前者が価値を生きることを志向するのに対し、後者には価値について考え抜く営みも含まれる。この整理

を踏まえ、伊藤は、現実存在する選択肢や規範、定まった価値の外部へ踏み出すこと、あるいは明確な答えのない状態に耐える不安定さと向き合うことこそが倫理に伴う迷いや悩みであり、そこに倫理の創造性がある⁵⁾と指摘する。また、Lambek は日常における倫理へのアプローチについて、『『倫理的 (ethical)』とは、単純に何をすべきか、ということではなく、実際に何をしているのか、何をしてしまったのか、何を放置してしまったのかということに向き合わなければならないということ』⁶⁾であると述べている。

以上を踏まえ、本論考では倫理を「不確かな状況においてためらいながら、何をしているのか、など自らの生き方と照らし合わせつつ、価値について考え抜くこと」と措定する。そして、それを大きな理念や抽象的視座^{補注(2)}としてではなく、もっと地べたにある相互行為や出会いのなかに現れる些細な戸惑いや受苦として捉える。以降では、ケアすべきであるとされる場面でさえ、そもそもケアできるかどうか定かではないような、ケアと倫理が揺らぐ場面を考える。

2. *Life Beside Itself* が提示するケアと倫理

(1) 内容と要点

Life の概要を示そう。スティーブンソンは 2000 年に、カナダ北西部ヌナブト準州のイヌイト社会を対象としてフィールドワークを行った。結核対策 (1940～1960 年代) や自殺予防 (1980 年代以降) を重要課題としてきたカナダ政府は、イヌイトがただ生きていることそれ自体に至上価値を置き、福祉制度の整備や生権力的介入を推進してきた。スティーブンソンは、アルコール・薬物依存や自殺の増加・深刻化という状況を背景に、自殺ホットラインの活動などにも関わりながら若者たちを中心に調査を行った。イヌイトは先住民であるがゆえに国民化政策や医療サービスの対象として保護される一方で、管理と介入の対象ともなり、その生死は統計や制度の枠組みのなかで把握される状況に置かれていた。スティーブンソンは Life において、身近な死が決して例外的ではない社会のなか

で、不確かさやためらいを抱えながら生きる若者たちの姿を描き、そこに濃密に立ちこめる、ままならないケアや日常的な苦悩、空虚さに焦点を当てている。

スティーブンソンによれば、このようなままならなさは、日常のさまざまな場面に立ち込めていた。たとえば、カナダ政府は結核患者を遠隔地のサナトリウムへ収容し、自殺防止キャンペーンを社会の隅々にまで浸透させてきた。それらは一見するとイヌイト市民をケアしているかのようにみえる。しかし、そうした取り組みは、生を保護し死を減少させるという行政的目標とも密接に結びついている。その過程において、生と死は単純化・数値化され、統計的な対象として還元・把握されていく。また、「自殺はダメ、生きて！」と呼びかける標語やホットラインも、たしかに一つのケアの形態ではある。けれども、それは匿名化された関係性のなかで行われるものであり、相手がどのような人物であるかは必ずしも問われない。虚無が蔓延る。

このようにただ生きていること自体が最優先される特殊な価値尺度、すなわち、身体的生の維持が優先され、精神的生のあり方が十分に問われない状況が、若者たちの生の世界を暗澹と覆っている。ケアがもたらす一見した善性は、植民地化あるいは福祉医療的介入の制度化を通して形成され、やがて自明なものとなっていく側面をもつ。こうした制度化の過程において、人びとの日常的な生への態度や、死者を含む他者との関係性は、しばしば周縁化され、不可視化されていく。そうした関係性に根ざしたケアを捉え直すことは、人びとが自明視してきた生権力的介入のあり方を、静かに問い直す契機となる。

こうした構造のなかで若者たちは、その違和感を鋭敏に感じ取りながらも、それを完全に振り払うことはできない。日常化した自殺や事故、亡くなった友人への喪失感、夢の経験などを通して、彼／彼女らは希望の不在に対する淡々とした親近感とともに、「むしろあの世の方が楽かもしれない」という憧憬を抱くことすらある。彼／彼女らの生は、ここではないどこか、ある種の曖昧な時間性のなかを漂っているかのよう

である。スティーブンソン自身もまた、匿名の他者へのケアに関わり続けながら、「生き続けてほしい」という願いを抱きつつ若者たちの隣にとどまり続けた。だが、その過程において彼女自身もまた、ケアの実践に懸命に関与しながらも、生死の事実に向き合うことやケアそのものの意味がわからなくなっていく。

（２）伴侶、あるいはケアするように書く倫理と態度

スティーブンソンはこうしたフィールドワークを通して、私たちがケアに対して一般的に抱くような愛情や親密さにまつわる連想、あるいは既成のイメージから相対化を試みる。そのなかで彼女は、誰かが気になること、それに伴って気になる他者に関心を向ける（concern）／関わり続ける（attend）際の倫理や特定の構えとしてケアを捉える。

こうした理解はケアを善意や望ましい結果、あるいは慈悲の心のこもった応答と結びつける見方を退けるものである。生活の流れのなかでときに倒錯したかたちで現れるケアの諸相を、その複雑さを保ったまま視野に入れることが重要であるとスティーブンソンは考える。むしろ、このような理解によって、ケアに含まれる微細な意味の揺らぎや多様な色合いが開かれるとともに、苛立ちながらもケアしたいと願う私たち自身のアンビバレントな欲望など、実際になされるケアの乱雑さも見えてくるのだと彼女は主張する。

彼女は事実が曖昧になる瞬間やためらいの瞬間を尊重すること、そして対象を固定化して「何者か」として把握するのではなく、「伴侶（companion）」として想起すること、といった「ケアするように書く（write with care）」という視点を Life のなかで提示する。彼女が見出そうとするのは、ただ傍らにいて声を聞く存在を許容し、その存在と関わり続けるあり方としてのケア、そしてそのための見方・書き方である。明晰に理解できないものをも正当なエスノグラフィの対象とするという Life の基本的態度は、不確かさのなかで行われるフィールドワークにおいては、事実を収集すること以上に、むしろ事実そのものが曖昧になる瞬間に注意を向けることが重要であるという直

観にもとづいている、と彼女は述べる。

中村は Life を参照しながら、不確かな事実をあえて曖昧なまま抱え込む態度は、書く主体と書かれる客体との境界を溶かし、両者がともに不透明な現実を生きる可能性を示唆していると指摘する。中村はスティーブンソンの言葉を引用し、次のように述べる。

「ともに生きる、とは滑らかな言葉だが、他者の経験がそのままわかるということではない。むしろ、躊躇いの瞬間のなかにある彼の感覚に私たちもまたとらわれている、というとらわれの経験を尊重することを意味する」⁷⁾。

私たちが何かを知るためにその場にいらながらも、掌握しえない現実には圧倒されるとき、私たちはどのように関わるができるのだろうか。だが、そこに明確なよさがあると信じ、それを追求しようとする、結局のところ何が誰にとってどのようによいのかさえ見失ってしまう。スティーブンソンは、ケアがよきものへ向かう氣勢や行為を介して、ある種のバイタリズムと結びつく可能性を指摘し、モルのケア論（本特集・序および辻本論考参照）との比較を行う^{1),8)}。

モルが提示するのは、患者がよりよい状態を求め、それに応答しながらケアに携わる人びとが試行錯誤を繰り返し、粘り強く関わり続ける実践である。けれども、スティーブンソンがフィールドにおいて身をもって経験したのは、そのようなニーズや生に対する明確な志向性ではなかった。むしろそれは、生の過剰さに付きまといながらも、ただ傍らに居続けることしかできなかった、という経験であった⁷⁾。この対比こそが、ケアにおける善さとは単にその内容が明確ではないことに加え、善さを欲すること自体もまた、あらかじめ所与のものではないことを示している。

Life のにおけるケアの記述を通して、読者である私たちもまた、ケアのイメージが私たちを捉えて離さなくなるとき、それが自己や身近な人びとの苦しみの経験と部分的に重なり合い、情動の反転を引き起こしうること気づかされる。ここで求められているのは、整然とした分析へと回収することをいったん留保す

ることである。何がよいことなのかがあらかじめ定まっている日常が裂開してしまう出来事を看過せず、その出来事にとらわれ続けながら書くこと。ためらいや迷いを許容する聴き方と書き方が、自らの戸惑いも描きながら、現実とそこに懊悩する人びとの感情に巻き込まれることを通して、自らの態度や記述を更新していく別様の関わり方やケアの実践の可能性を開きうる。そのような可能性を Life は示唆している。

3. 逸れてしまう経験、とどまろうとする倫理

(1) ためらう、キリがない、目を背けたい

以上で見てきた文脈は、災害復興研究が想定するケアや倫理のあり方とそのまま重なるわけではない^{補注③}。だが、ふとわかるものはある。調査者であれ支援者であれ、復興の現場に携わる者にとっては、そこに部分的に重なり合う希望のない経験を見出し、それを理解する手がかりとなるようなケアや倫理の輪郭がみえる。筆者にとってもまた、それは他人事ではなく、繰り返し煩悶する場面がある^④。七尾市中島町で災害ボランティアに携わった際のフィールドノートには、次のような一節が明確に記されている。

「人の生活感が出るモノを捨てるのにためらってしまう」(2024/02/25 センターでの夕食にて、フィールドノート)。

筆者はこの言葉にまつわる前後の記録を、折に触れて思い返してしまう。とりわけ、この一節を読み返すことには、いまなおためらいがある。他者のモノを捨てるという行為が、それが被災後であれそうでなかろうと、その人の尊厳までも処理してしまうかのような感覚に陥り、強い忌避感を覚えていたからである^⑤。

被災者や他のボランティアとともに、その場にある声やニーズを聞き取りながら、慌ただしく作業を進める。感謝の言葉も差し入れも、温かな日差しも嬉しい。しかし同時に、終わりの見えない厩大さがあった。厳冬のわずかな晴れ間とみぞれが降り注ぐ日の作業では、どこから現れたのか、カメムシの大群が雑誌の隙間や紙箱の蓋の裏にびっしりと潜み、仕分け追い払う

たびに強烈な臭いを放つ。電気の止まったまま放置された冷蔵庫を処理する際は、腐敗した野菜や肉、魚の悪臭が防塵マスクの隙間から入り込み、思わず作業を止めて嗚咽する。重すぎる業務用冷蔵庫、貴重な陶器や桐製の什器、ひしゃげた金属板、割れたガラス……。

キリがない。筆者は、残すものと不要なものを依頼者とともに確認し仕分けること、大きなお家や敷地、納屋や倉庫からあらゆるものをひっくり返して出てきたその厩大な量、そして意図せず他者の形見や空間からその人の生活の痕跡を透かし見てしまうこと、それら雑多な出来事の反復のなかで、一人取り残されたような心もとなさに幾度となく襲われていた^⑥。

そこでは何が「よいこと」なのかは、はじめから定まっていなかったし、わからなくなってしまった。だから、そのただなかでは小さな喜びすら見出すことができなかった。復興へ向かうはずの日常の肯定にも、そこにあるはずのあるべき「よさ」にも目を向けることができず、自分や被災者の存在そのものに意味を見出せなくなるほど、暗い感情に覆われていた。「私はこんなにも弱かったのか」と思った。目の前の現実が如実にひび割れていき、そこから逸れてしまった。

その2日後、水道や電気、ガスなどのライフラインが停止していた状況のなかで、重労働による疲労と筋肉痛、長く入浴できなかった身体の不快感を抱えながら、筆者は風呂を求め、まるで逃げるように軽トラックを走らせて、雪の残る山道を越え、隣市である氷見市の温泉へ向かった。その雪道と海の光景、筋肉痛と寒さで悴み上手く動かない手や腕の感覚、久しぶりのお風呂でシャンプーが泡立たなかった驚きなどは、いまでも鮮烈に記憶に残っている。

詳細なフィールドノートの記述は、その地点で止まっていた。その後の記録は断片的に残されていたものの、それを整理し、清書し、記憶を辿ること自体がもはや目を背けたい経験となっていた。しばらく時間が経ってから、その経験を読み返したとき、筆者自身もまた、それは単に恐怖や自らの弱さによるものではなかったかと疑った。過剰な経験によって感受性が過敏

になっていたのだと、自ら納得しようとした。

今となって振り返れば、ゴミ処理ボランティアの経験を通して、自身の脆さや燃え尽き、そしてその深部にある感情にとらわれていたのだと思う。災害以前には当然のように存在していた人とモノ、風景への愛着は、地震によって突如として脆く崩れ落ち、その土地の歴史や風土とともにあった営みは、失われたかたちとして露わになっていた。そこには、やるせなさや傷みがむき出しになっていたのである。筆者が自らの手を介して捨てることになった、家屋整理の過程で処分することになった額縁に綺麗に糊付けされて収められていたパズルに対して抱いた戸惑いもまた、そのような尊厳や覚悟に対する、不器用な応答であり、同時に無力さの表れでもあったのかもしれない。支援する／されるという二項対立的な構図を超えて、モノを媒介として流れ込んでくる感情や思考が、筆者自身を巻き込みながら感応していた^{11,12)}。

(2) かかわることとそこにいることの倫理

災害復興の支援現場では、被災者に寄り添うことや、ただ傍らに在ることの重要性がしばしば指摘される。宮本が述べるように、復興とは災害による被害と既存の社会課題との相互的な解決を模索する過程であり、その目標もまた、自らの生活を見つめ直すなかで生成されていくものであるとすれば、あらかじめ未来に向けた明確な目標が設定されているわけではない。そのため、外部支援者の関わり方も、それに応じて変化していくものとなる¹³⁾。

こうした外部支援者が介入する過程で形成される時間的態度について、宮本は「めざすこと」と「すごすこと」という2つの関わり方の違いを論じている。前者は、よりよい状態を「めざす」関わり方であり、後者は当事者のかけがえのなさを承認しながら「すごす」関わり方である¹⁴⁾。とりわけ前者は、「よりよい状態」を志向するがゆえに、現在の状態に何らかの欠如を暗黙のうちに前提としてしまう。そのため、支援の関係性やプロジェクト自体が頓挫する可能性を孕んでいる。だからこそ、未来へ向けた実践をより豊か

なものにするためには、「寄り添う」「ただ傍らに在る」といった言葉で表現されるような、現在に向けられた「すごす」関わりが重要になるという。

たしかに、その指摘は重要である。だが、第2節(2)でみたスティーブンソンの議論に即していえば、それは被災者が生活や復旧復興に対してよりよい状態を明確に望み、それに対して支援者がニーズを把握し、互いに応答し続けることが可能な場合において、とりわけ有効に機能する議論である、とも考えられる。私たちは明確な問題が存在していたとしても、ときに誰かの欲求から目を背け、問題そのものを否定したり、そこから逸れたりしながら生きることもある。にもかかわらず、ケアや善き生、未来への努力を中心に据えた記述は、ときに人びとがケアに失敗すること、あるいは放置してしまうこと、さらには善き生への努力や他者との交わりそのものを断念するような生の断面や倫理の契機を見落としてしまう可能性がある¹⁵⁾。

そのように考えれば、現実から逸れてしまうことは必ずしも筆者だけの経験ではなく、葛藤はフィールドで分有されていた。先のフィールドワークにおいてもまた、ベテランの男性スタッフは片付け作業のなかで被災者の尊厳や家屋を処理する覚悟の重さへの戸惑いをたしかに感じ取っていたし、長期ボランティアスタッフとして関わっていた女子大学生も「だから、私、人と一緒にいますもん。私がしたくない。私は捨てられないからそっと置いてる」と語っていた¹⁶⁾。そこには懊悩する他者との関わりでのなかで、現実から完全に逸れてしまわないよう、なんとかよさを見出そうとし、そこにいようとする苦悩と倫理が垣間見える。

こうした関わることやただ傍らに在ることに内在する悲嘆や喪失、さらには復興に関する身体的・情動的な経験を扱う研究においてさえ、研究者自身の動揺や葛藤を真正面から扱うことは難しいとされている。実際、研究者は自らのそれらの経験を調査協力者の経験と重ね合わせる書き方を避ける傾向にある¹⁷⁻²⁰⁾。だが、他者との共鳴を不可避免的に伴う研究者の身体やその記憶は、単に私的なものとして処理されるべきなの

だろうか。そうした問いが改めて立ち現れている。

（３）とどまりながら、渦を巻く

専門的な観察者は、不安を軽減し効率的に機能するための方法を編み出す。だが、その態度はときに権力勾配への加担や他者を苦しみから解放できない無力感、行動すべきか観察すべきか途方に暮れる状況に直面したときの不安を取り除くために、方法そのものへの固執という典型的な姿勢を伴ってしまう²¹⁾。

こうしたアポリアを背景として、近年の災害研究では、ポジショナリティは固定的な属性ではなく、具体的な文脈との関係のなかで絶えず組み替えられていく実践として捉えられている。Friedrich et al.は、ポジショナリティに関する記述が、ローカルな関係性や不平等の文脈から切り離されることによって形式化され、ときには有害なものになりうることを指摘している²²⁾。その代替として彼らが提案するのは、研究者が現場へどのように関与し、いかに害を最小限に抑えようとしているのかを、断片（vignette）を用いて記述する方法である。

ここで重要なのは、現実から逸れ、沈黙や「書かない」という選択へ向かうのではなく、記述という形式を介してでも、その居がたい現実の場にとどまり続けようとする経験である。そのような書く行為は、中立的な報告ではなく、むしろ倫理的な実践として捉えることができる²³⁾。それは何を、誰に対して、どのような代償を伴いながら語ることができるのかを、継続的に判断し続ける営みでもある。倫理的に書くとは、表象が決して中立的ではないことを認識しながらも、調査協力者たちの多様で、ときに相反する期待と向き合うことである²⁴⁾。またそれは、出会いや関係性を固定的な解釈や既存の理論的枠組みへ還元することを避け、感情や情動を「すべき」とみなす道徳的権威へ回収することなく、開かれた状態や曖昧さ、それらに対する注意深さを保ち続けることでもある²⁵⁾。

Tsuchida & Azuma は、このような姿勢を保持しながら、記述とそこでの経験に向き合うなかで、自他のあいだを揺れ動く「渦巻く（Swirling）」という概念を提

示している²⁶⁾。ここでいう他者とは、調査協力者だけでなく、未来の自分自身をも含んでいる。渦巻くとは、著者のアカウンタビリティを義務や不確実性の条件のもとで絶えず交渉され続けるものとして捉え、経験を固定的な意味や早計な道徳的判断へ還元することなく、倫理的な語りを可能にする概念である。それは「倫理的な実践としての脆弱性（vulnerability as ethical practice）」²⁷⁾とも響き合いながら、自らが影響を受けることそのものへ向けられた倫理的態度を含んでいる。同時に、そうした情動を抽出可能なデータや道徳的権威へと変換することには抗う姿勢であり、自らの痛みや目の前の身体や感覚を通じた苦悩に曝されながらも真摯に向き合う営みである。

ここで注意することは、エスノグラフィが研究成果や理論的貢献を明らかにする一方で、多くのものがおもその陰にとどまり続けていることである。すなわち、エスノグラファーには隠されたままのもの、主体間の関係性のなかで気まずさや語りがたさを伴うもの、そして断片的で部分的なまま、いまだ生成の途上にあるものが存在するのである²⁸⁾。このように、人や場所、出来事における希望の見えなさととらわれながらも、その経験のトーンを上書きすることなく書き切ろうとすることは、「善い」とされる規範や人格、ポジショナリティ、あるいは整然とした物語を、あたかも一貫して把持しているかのように振る舞う書き手の位置から降りるための重要な視点となりうる。

4. ケアするように復興を書くこと

他者を「何者かとして（as someone）」対象化する記述は、ある経験や現実を「客観的・対象的なもの」²⁹⁾として位置づけ、一人の人間としてのこの私から切り離された、すでに解決済みの問題へと変換してしまう可能性を孕んでいる³⁰⁾。福田はソーシャルワーカーへのインタビュー調査を通して、彼ら／彼女らの臨床経験に伴う苦悩を記述しながら、経験の意味を問い続け、その経験を対象化することなく自己の内に留めつつ応答する往還の構造が、「主観と客観のあいだに

ある」²⁹⁾ことを示している。そして、そのような過程において人は、他者から呼びかけられ、出来事へ巻き込まれ続ける存在となるのだと説明している³⁰⁾。

出来事へ巻き込まれながら応答するあり方を、直線的な道筋や明快な解決、あるいは他者理解を上塗りするような共感を体現する強い主体としての筆者や調査者、ボランティア、問題解決へ導く存在としてではなく、ためらいや傷つき、とらわれの経験を抱えながら揺れ動く存在として捉え直したならば、私たちはどのように書くことができるのだろうか。

きっとフィールドでの経験も、災害後の復興も、常にわからなさのなかに留まり、戸惑い、ときに自己を曝しながら進んでいく。そして、そこで見出される「よさ」もまた、少しずつ形成され、内在化されていくものである。あるいは、その「よさ」自体が見出せないまま、ただ傍らにることしか選べず、ともに時間を過ごしていくこともある。その過程へ巻き込まれ、自らもまた動揺しながら聴くこと、そして書くことこそが、呼びかけられた者として、ただ傍らにいた伴侶のあり方や態度を可能にするのではないだろうか。

でも、どうやって？いくつかヒントはある。たとえば、Pillow が提示する「居心地の悪い内省性 (uncomfortable reflexivity)」³¹⁾は、研究者の役割を安定化させるのではなく、不安や違和感を生み出し、確定しがたい経験や自己を揺さぶるものとして中心的役割をもつ。それは、分析のための単純化ではなく、倫理の人類学において議論されている、生の困難さそのものへ注意を向ける Motta の「日常的リアリズム (ordinary realism)」³²⁾、習慣化された道徳的なあり方が揺らぎ、倫理的な要請が明示的になる「道徳的破綻 (moral breakdown)」³³⁾として理解することもできる。

本論考で扱ってきた事例に引きつけて考えるならば、意味のある品物を捨てるべきか迷うことや、共に集う人びとから言葉にしがたい辛い経験を訥々と語られることへのためらいには、罪悪感や無力感、葛藤の瞬間が含まれている。この断片的事例は、瓦礫を整理するという行為そのものが、ケアと必要性とのあい

だの緊張を露わにし、支援の意味それ自体を問い直す契機となっていたことを示しうる。このためらいや居心地の悪さは、人や出来事への適切な介入の失敗ではなく、「渦巻く」あり方の条件そのものである。それは研究者を、ずれや責任に対して開かれた状態へ保ち続ける。こうした瞬間は、エスノグラファーの苦痛を解消すべき問題としてではなく、倫理的な関与に不可避免的に伴う条件として浮かび上がらせる³⁴⁾。

近年のフェミニスト研究において研究者の身体的・感情的経験は、客観性を阻害する要因ではなく、知識生成に不可欠な要素として捉えられてきた³⁵⁾。また、フェミニスト災害研究では、こうした視点を踏まえながら、身体や感情、声をめぐる権力関係が災害経験の理解にいかに影響するかが議論されている³⁶⁾。この観点からみれば、筆者が経験したためらいや動揺もまた、単なる私的感情ではなく、復興の現実が身体を通していかに経験されるのかを示す契機として理解できる。そして、復興を書く行為それ自体もまた、他者の経験を単に記録する作業ではなく、どのような声を可視化し、あるいは不可視化するのかという政治的実践を含んでいる。

さらに、フェミニスト災害研究をリードする Alburio-Cañete らは、反省的・創造的・批判的な方法論の必要性を提起し、既存の方法では捉えきれない経験や声へ接近する必要性を論じている³⁷⁾。本論考で扱ってきた「逸れてしまうこと」や「ためらい」もまた、容易に言語化できない経験に対して無理に説明を与えるのではなく、語りえなさのなかに留まり続ける試みとして位置づけられる。本論考で提案する「ケアするように復興を書く」という視点も、このような方法論的転回の延長線上に位置づけられる。

生の脆さやままたらなさのなかで、人びとが自分や他者にとっての復興の困難から逸れながら過ごしていたという事実は、私たちに記述のあり方そのものの再考を迫っている。「ケアするように書く」というアプローチは、事実の確定や論証を重視する学問的営為のなかで見過ごされがちな、生の断面へ寄り添うもの

である。この生のままならなさへの注目は、単なる「よさ」をめぐる試行錯誤ではなく、特定の文脈に置かれた脆弱な生の全体を対象化することなく受け止めようとする姿勢へ開かれている¹⁵⁾。

まとめよう。本論考における「復興をケアするよう書く」とは、生存者・支援者・研究者が何を「よい」あるいは「正しい」応答とみなすのかをめぐる交渉される、矛盾や未解決を抱えた実践のただなかに留まり続けることを意味する。ケアは明確な道徳的行為として現れるのではなく、両義性やためらい、部分的な関与のなかから立ち現れる。私たちは復興のなかで押し寄せる課題や規範に盲目的に従うのではなく、ときに立ち止まり、戸惑い、ためらう。たとえ苦しみや悲しみを滑らかに理解することができなかったとしても、不意に他者とともにあることを求められることがある。そのままならなさに揺さぶられ、とらわれながら、自らの内にある伴侶としての存在や他者との関係性が応答し、その過程そのものを記述へ刻み込んでいく。そうした態度こそが、「ケアするように復興を書く」ための重要な倫理的な指針となると筆者は考える。

5. おわりに

本論考では、Stevenson の Life を手がかりとして、「被災者／支援者」という二項的枠組みを問い直し、復興の現場におけるためらいやままならなさ、とらわれの経験を検討してきた。復興に関わる倫理は、他者の苦痛を理解し解決することに還元されるものではなく、むしろ、理解しきれなさや応答しきれなさのなかにとどまり続ける実践として立ち現れ、二項的な枠組みの理解をずらすことを試みた。

理論的には、本論考はケアを支援の実践や対人関係に限定するのではなく、復興を書くという記述実践そのものへ拡張した点に特徴がある。既存の災害復興研究では、支援やレジリエンス、回復の実践が中心的に議論されてきた一方で、研究者や支援者自身が巻き込まれながら経験する動揺や葛藤は、十分に扱われてこなかった。本論考はフェミニスト災害研究や倫理の人

類学の視点を参照し、ケアするように復興を書く際にはそうした不安定さや身体的・情動的経験も、復興へ関与する際の倫理的実践の条件として位置づけた。

以上の議論を踏まえ、本論考の冒頭で提示した、ケアをめぐる「聴く／書く行為や認識・実践に関わる立ち位置と倫理に何を付け加えうるのか」という問いへ改めて立ち返りたい。

災害現場や復興過程において私たちが直面するのは、単なる合理的な判断や効率性の問題ではない。むしろそこには、語りえない経験やためらい、迷いといった、倫理がむき出しになりうる現実が存在する。北アイルランドにおける紛争が日常化した経験や語りを調査してきた酒井の言葉を借りれば、「既知の世界から一度手をはなし、自分の体験に比較すればわずかで断片的な情報から想像された不安定な世界に入っていくことなしに」³⁸⁾被災の傷を聴き、知るという実践は成立しない。自ら関係性の意味を一方的に決定するのではなく、他者との関わりの中に身を置くことこそ、聞き手としての自らを傷つきやすい、すなわちヴァルネラブルな位置へ開くことでもある^{39,40)} 補注(4)。

このようにしばしば心を掻き乱す現場のリアリティに対して、私たちはいかなる倫理をもって向き合うことができるのだろうか。この問いに対して、阪神・淡路大震災を多様な形で経験し生きてきた人びとの手記を分析した高森は、「ままならなさ」という言葉を提示し、次のように述べている。

「実際の研究活動では、研究者の意志と責任においてコントロールできないような、コミュニティの存在そのものにかかわる＜ままならなさ＞が生じる。(中略) 研究者にとって、＜ままならなさ＞は決して稀な事態や感覚ではなく、むしろ彼らはしばしばそれを経験していると思われる。(中略) ただ、それが研究における「問題」として置かれ、解決が目指されることはほとんどないといっている。研究活動の浅い大学院生をはじめとした研究者は研究活動を展開する中で＜ままならなさ＞に巻き込まれ、それをいかに意味づければ

よいか逡巡し、論文やエスノグラフィを書き上げられない事態を招くだろう。(中略)しかし、くまなならなさへの眼差しが記述されないことは、研究活動で変化するコミュニティの動きの肌理を潰してしまい、コミュニティへの回路を閉ざしてしまうだろう」⁴¹⁾。

この「くまなならなさ」は、本論考で提示してきた「ケアするように復興を書く」という視点とも響き合う。両者に共通するのは、対象や世界を明晰に理解しようとする知的態度を一度脇へ置き、活動やコミュニティに巻き込まれるなかで生じる、とらわれるようなわからなさのなかへ留まり続けることを通して、出来事と自他を漸進的に理解しようとする寄り添う倫理だ。このことは復興の現場に関わる研究者や支援者に対して、明確な解決や成果だけを志向するのではなく(特集・望月論考参照)、ときに立ち止まり、ためらいながら他者とともにあることのケアの重要性を示唆している。災害研究においても、断片的な経験や沈黙を単なるノイズとして扱うのではなく、知識生成の一部としても捉え直す必要性を提起している。

本論考では、復興を書くという営みのなかで、こうした倫理が復興のただなかで傷ついた自他の経験に伴う動揺やトラウマをなかったことにするのではなく、何度も経験に立ち返り、じっと見続けようとする姿勢を支えるケアとなりうることを示した。重要なのは、別様でありえた復興のあり方やケアの可能性について、対話を繰り返し開き続けることにある。本論考が示したのは、復興におけるケアとは、他者とともにもそのままならなさを引き受け続ける倫理的な実践でもあるという点である。このようなケアの視点が復興を達成されるべき目標としてではなく、他者とともにもその不確実性に応答し続ける関係的な実践として捉え直す可能性を提示している。

補注

- (1) 本論考は2025年11月23日日本災害復興学会 能登復興実践研究交流会にて発表した「ケアするように復興を書く：Lisa StevensonのLife Beside Itselfを手がかりに」およびTsuchida & Azuma²⁶⁾をもとに、大幅に加筆修正および日本語訳に直した原稿である。

- (2) 防災や復興に関する大きな視座としての倫理は、児玉・池端⁴²⁾や児玉⁴³⁾、ザック⁴⁴⁾、英語論文ではLöfquist⁴⁵⁾、Geale⁴⁶⁾、Koon⁴⁷⁾などが挙げられる。
- (3) 文脈を置き換えて考えれば、たとえば、ひとりの尊い命やストーリーが数に還元・圧縮されてしまうこと、復興やボランティアの制度化、復興計画や政策、スローガンが匿名化されうる状況下で迅速・効率的に行われることもそのうちとして指摘できる。
- (4) 調査者自身が脆弱性にさらされた場に身を置くことが、他者の経験を理解し記述するための基盤的条件であるという考え方については、筆者自身の博士論文や調査経験などを振り返れば、その側面が存在することは確かである。だが、その前提については今日では今一度慎重な検討が必要であろう。それは研究倫理に直ちに反するものではないものの、研究者自身の身体的・精神的安全やケアの問題を周縁化してしまう危険性を孕んでいる。その背景には、自己犠牲や過度な没入を研究実践の正当性として強調する認識が含まれている場合もあり、その前提自体を批判的に検討する必要がある。近年の反省的・フェミニスト研究では、自己犠牲的な没入を知識の正当性の根拠とするのではなく、研究者自身の脆弱性や限界を含めて研究実践を捉え直す必要性^{35,36)}が指摘されている。このことは調査者が傷つくこと自体を価値化するのではなく、巻き込まれながらも自身の限界やケアの必要性を含めて記述へ組み込む姿勢の重要性を示唆している。この議論は、トルコ・シリア地震における災害実践についてフィールドワークしてきた永田真子さんに加え、石川県珠洲市の外浦でともにした東詩歩さんや室山雅さんとの対話からインスピレーションを得ている。

参考文献

- 1) Stevenson, L. (2014), *Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic*, University of California Press.
- 2) インゴルド, T. (2020), 人類学とは何か, 奥野克巳・宮崎幸子(訳), 亜紀書房.
- 3) 中村沙絵 (2024a), 理性的言語を超えて: 別様に聞く、書く, 大村敬一・中空萌(編) フィールドワークと民族誌, 放送大学教育振興会, pp. 248-65.
- 4) 古田徹也 (2013), それは私がしたことなのか: 行為の哲学入門, 新曜社.
- 5) 伊藤亜紗 (2020), 手の倫理, 講談社.
- 6) Lambek, M. (2010), Toward an Ethics of the Act. In Lambek, M. (Ed.) *Ordinary Ethics: Anthropology, Language, and Action*, pp. 39-63. Fordham University Press.
- 7) 中村沙絵 (2024b), コーラ・ダイヤモンドの言葉が響くとき, 國學院雑誌, Vol.125, No.2, pp. 18-32.
- 8) 中村沙絵 (2025), 第1章 縫い繕うケア, 西真如・森明子・有井晴香(編) 心配と係り合いの人類学: この世界を繕い直すためのケアの理論と実践, pp.21-38, ナカニシヤ出版.
- 9) 土田亮 (2026), 被災と支援へのくまなならなさの渦巻き: 誰かとして関わることの探究と記述に向けて, エモーション・スタディーズ, 印刷中.
- 10) 酒井朋子・奥田太郎・中村沙絵・福永真弓(編) (2024), 汚穢のリズム: きたなさ・おぞましさの生活考, 左右社.
- 11) Morimoto, R. (2021), *Home Otherwise: Living Archives and Half-Life Politics in Post-Fallout Coastal Fukushima*, *Cultural*

- Anthropology*, Vol. 36, No. 4, pp. 573-579.
- 12) 姜信子・山内宏泰・志賀理江子・川島秀一・山内明美・東琢磨・被災物ワークショップ参加者 (2024), 被災物: モノ語りは増殖する, かたばみ書房.
 - 13) 宮本匠 (2015), 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり: 東日本大震災の復興曲線インタビューから, No. 14, pp. 6-18.
 - 14) 宮本匠 (2017), 「災害と共生」を前にして: 内発的であるとは何か, 災害と共生, Vol.1, No. 1, pp. 21-26.
 - 15) 中村沙絵 (2021), 道徳哲学と民族誌の「もう1つ」の交わり方: きれいな分析を拒む現実に留まること／逸れること, 文化人類学, Vol. 86, No. 2, pp. 250-268.
 - 16) 土田亮 (2024), ケアする災害復興に向けたモノとの関係性: 石川県七尾市中島町での民間災害ボランティア支援を通じて, 都市計画, No. 369, pp. 130-131.
 - 17) Numazaki, I. (2012), Too wide, too big, too complicated to comprehend: A personal reflection on the disaster that started on March 11, 2011, *Asian Anthropology*, Vol. 11, No. 1, pp. 27-38.
 - 18) Abeysinghe, S. and Leppold, C. (2023), Ethical research practice in health and disasters, *International Journal of Disaster Risk Reduction*, Vol. 92, 103728.
 - 19) Abeysinghe, S., Honda, K., Leppold, C., Williams, A.L., Ozaki, A., and Goto, A. (2025), What does it mean to conduct ethical research after disasters? A case study of the 3.11 disaster in Japan, *Disasters*, Vol. 42, No. 2, e12781.
 - 20) Schobert, M., Krüger, M., Gabel, F., Orru, K., Nævestad, T.O., Olson, A., and Schieffellers, A. (2023), How do we know vulnerability when we see it? An approach to integrating ethical reflections into empirical disaster research, *International Journal of Disaster Risk Reduction*, Vol. 97, 104049.
 - 21) Behar, R. (1997), *The Vulnerable Observer: Anthropology that Breaks Your Heart*. Beacon Press.
 - 22) Friedrich, H.K., Ayala, Y., Liu, J., and Villarreal, M. (2025), Positionalities in disaster recovery research: Reflections from fieldwork across the Gulf South, *Disaster Prevention and Management: An International Journal*, Vol. 34, No. 4, pp. 529-540.
 - 23) Laidlaw, J. (2014), *The Subject of Virtue: An Anthropology of Ethics and Freedom*, Cambridge University Press.
 - 24) Chao, S. (2024), To write or not to write?: Toward a hesitant anthropology, *American Ethnologist*, Vol. 51, No. 1, pp. 63-71.
 - 25) Biehl, J. (2013), Ethnography in the way of theory, *Cultural Anthropology*, Vol. 28, No. 4, pp. 573-597.
 - 26) Tsuchida, R. and Azuma, S. (2026), Ethics in Aid and Being in a Quandary: Writing and Engaging Ethically during Post-Disaster Engagement and Commitment, *Disaster Prevention and Management: An International Journal*, Vol. 35, No. 6, pp. 155-168.
 - 27) Jakimow, T. (2022), Vulnerability as ethical practice: dismantling affective privilege and resilience to transform development hierarchies, *Third World Quarterly*, Vol. 43, No. 3, pp. 617-633.
 - 28) McLean, A.L., and Leibing, A. (Eds.) (2008), *The Shadow Side of Fieldwork: Exploring the Blurred Borders between Ethnography and Life*. Blackwell.
 - 29) 木村敏 (1982), 時間と自己, 中央公論社.
 - 30) 福田俊子 (2023), ソーシャルワーカーの「忘れられない臨床体験」: 巻き込まれ続けることによって生成される専門職者としての基軸, 榊原哲也・西村ユミ (編) 医療とケアの現象学: 当事者の経験に迫る質的研究アプローチ, pp. 165-178, ナカニシヤ出版.
 - 31) Pillow, W. (2003), Confession, catharsis, or cure? Rethinking the uses of reflexivity as methodological power in qualitative research, *International Journal of Qualitative Studies in Education*, Vol. 16, No. 2, pp. 175-196.
 - 32) Motta, M. (2019), Ordinary realism: A difficulty for anthropology, *Anthropological Theory*, Vol. 19, No. 3, pp. 341-361.
 - 33) Zigon, J. (2007), Moral breakdown and the ethical demand: A theoretical framework for an anthropology of moralities, *Anthropological Theory*, Vol. 7, No. 2, pp. 131-150.
 - 34) 中村沙絵 (2024c), 序: 閉回路 (loop) から外へ出る, 文化人類学, Vol. 89, No. 3, 376-387.
 - 35) Haraway, D. (1988), Situated knowledges: The science question in feminism and the privilege of partial perspective, *Feminist Studies*, Vol. 14, No. 3, pp. 575-599.
 - 36) Albuero-Cañete, K.Z. (2024), “Disaster through a feminist lens: epistemology, methodology, and methods,” Djillali, B. (Ed.) *Oxford Research Encyclopedia of Natural Hazard Science* (2026-05-25) .
 - 37) Albuero-Cañete, K.Z., Alejandria, M.C., and Kreyscher, K. (2025), “Guest editorial: Advancing reflexive, creative and critical research methodologies for disaster studies”, *Disaster Prevention and Management: An International Journal*, Vol. 34, No. 1, pp. 1-8.
 - 38) 酒井朋子 (2013), 長期紛争経験を聞くことの解釈学, 日本オーラル・ヒストリー研究, Vol. 9, pp. 168-181.
 - 39) 鷲田清一 (2015), <聴く>ことの力: 臨床哲学試論, ちくま学芸文庫.
 - 40) 竹沢尚一郎 (2022), 被傷性=脆弱性の生-政治: 東日本大震災後の人類学的災害研究, 文化人類学, Vol. 86, No. 4, pp.543-562.
 - 41) 高森順子 (2023), 震災後のエスノグラフィ: 「阪神大震災を記録しつづける会」のアクションリサーチ, 明石書店.
 - 42) 児玉聡・池端祐一朗 (編) (2026), 防災の倫理: 「正しい」災害対策とは何か?, ナカニシヤ出版.
 - 43) 児玉聡 (2023), 予防の倫理学: 事故・病気・犯罪・災害の対策を哲学する, ミネルヴァ書房.
 - 44) ザック, N. (2020), 災害の倫理: 災害時の自助・共助・公助を考える, 高橋隆雄 (監訳) 阪本真由美・北川夏樹 (訳) 勁草書房.
 - 45) Löfquist, L.L. (2018), Virtue Ethics and Disasters. In O’Mathúna, D., Dranseika, V. and Gordijn, B. (Eds.) *Disasters: Core Concepts and Ethical Theories*, pp. 203-215, Springer.
 - 46) Geale, S.K. (2012), The ethics of disaster management, *Disaster Prevention and Management: An International Journal*, Vol. 21, No. 4, pp. 445-462.
 - 47) Koon, A. (2020), Humanitarian response: Ideals meet reality. In Hoffman, S.M. and Barrios, R.E. (Eds.), *Disaster Upon Disaster: Exploring the Gap Between Knowledge, Policy and Practice*, pp. 88-110, Berghahn Books.